＜前回＞パウロの異邦人伝道

（１）パウロ神学の基本構造

1．核心点

・キリストの十字架と復活における神の救済の活動

・神の救済活動の一環としての異邦人伝道　→　自らの異邦人伝道の意義

2．諸論争の文脈に即した議論の展開：使徒としての正統性の弁明

→　いくつかの基本的な原則の存在、しかし首尾一貫した体系化はなされていない。

Rom1.1：

Παῦλος δοῦλος Χριστοῦ Ἰησοῦ, κλητὸς ἀπόστολος ἀφωρισμένος εἰς εὐαγγέλιον θεοῦ,

アガンベン『残りの時　パウロ講義』岩波書店。

・「パウロス・ドゥーロス・クリストゥ・イエースゥ、クレートス・アフォーリスメノス・エイス・エウアンゲリオン・テウ」（１０の言葉）

「パウロ、僕＝奴隷、救世主イエス」

3．普遍宗教としてのキリスト教：ユダヤ人と異邦人の全体に妥当する救済と真理

1) 救済史：旧約聖書の伝統の上に、イエスの宗教運動とその後の弟子集団、その役割を位置づける。

ユダヤ主義の克服とユダヤ人の新しい理解

律法・旧約の位置：預言と成就

→　キリスト教起源神話の成立＝ユダヤ教起源神話の改訂

2) 贖罪論：キリストの十字架と復活の意味、キリストとしてのイエス

3) 教会論：弟子集団（家の教会）、多様性と統一（キリストの体としての教会）

4．新しい歴史理解＝救済史（旧約と新約の統合）：キリスト教起源神話への寄与。

異邦人の救い　→　ユダヤ人の救い　→　被造物全体の救い

5．救済とは何か

・イエスの十字架（死）と復活への参与　→　キリストと共に死にそして生きる

神秘主義的あるいは密儀宗教的。法律的意味はむしろ二次的

・罪の力からの解放：古い存在から新しい存在への変容・移行

移行は信仰においてすでに始まりつつあるが、終末（再臨）における完成する。

6．救済に参与した人間は何をするか。

・自然な帰結としての倫理的な生活：律法的生は前提ではなく、結果。

・キリストの体の一体性（教会）への参与

7．いわゆる信仰義認論：「義の認められる」に止まらず、「義となる」。cf. ルター

ルター的伝統におけるパウロ理解に対して。

8．パウロ神学における義認論の位置づけ

・神秘主義（あるいはキリストとの内的関わりの経験）から信仰義認論へ

Ａ・シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義』→武藤一雄『神学と宗教哲学の間』

9. The doctrine of righteoueness by faith is therefore a subsidiary crater, which has formed within the rim of the main crater --- the mystical doctrine of redemption through being-in-Christ.

Carsten Claussen, "Albert Schweitzer's Understanding of Rightepusness by Faith according to Paul's Letter to the Romans," in: Daniel Patte und Cristina Grenholm（eds.）, *Modern Interpretations of Romans. Tracking Their Hermeneutical/Theological Trajectory*, Bloomsbury, 2013, pp.87-107.

（２）パウロ的キリスト教

10.「前の時代に活躍したパウロの宣教の成果はどうなったであろうか。確認できるのは、パウロの弟子たちともいうべき後継者たちが、使徒の遺産を継承・発展させていったことである。そのためにまず、パウロの手紙が集められ、編集され、学ばれた。

それが、新たに独立したキリスト教のアイデンティティ確立のためには、最大の策の一つであった。なぜかと言えが、パウロが提示した、律法（トーラー）を超越した救いの教説が、キリスト教をユダヤ教から分離するのに最適であったためである。そのために、一時代前はマイノリティでしかなかった「跳ね上がり者」で「急進派」のパウロの教えが、七〇年以降、にわかに脚光を浴び始めたのである。律法に従い、割礼を受けてユダヤ人になることを全く必要としない、しかしイスラエルの伝統直伝の救いを確証する教えこそ、皆の望んだイデオロギーだったためである。

しかしこれは、おそらくパウロ自身の意図とは全く異なるものである。彼は決して自らをユダヤ教から切り離そうとはしなかったどころか、自分こそユダヤ教の神の新たな啓示に最も忠実であろうとする者と理解したからである。」（佐藤、151-152）

11.パウロ神学のパウロ以降の展開。コロサイ書、エフェソ書における、宇宙的キリストへ。

↓

古代地中海世界・ヘレニズム世界の宗教文化的状況において。

クリスマスの意識化。

キリスト教起源神話の論理と宇宙論

教会暦＝時間の形態化。ここで、キリスト教は生として完成した。

＜概論講義：儀礼とサクラメント＞

キリスト教の信仰に生きる＝質的にリズム化された時間感覚（時間経験）をもって生活すること＝宇宙・歴史全体のリズムと個人的生のリズムの同調、永遠との関わりにおいて生きる生命の時間性

９．「宗教とは生（生活、生涯、生命）の形態化である」。三つの相。

信仰	→	究極的関心・自己同一性	→	行為の形態化
聖なるもの	→	ヒエロファニー	→	空間の形態化
儀礼	→	ヒエロファニー	→	時間の形態化

７．パウロ以降のキリスト教

（1）ヘレニズム都市という場に適合した宗教

１．キリスト教の母体としてのユダヤ教

古代地中海世界のヘレニズム都市の拡散したユダヤ人・ユダヤ教

1) AD.70 年以前のユダヤの総人口（『ユダヤ百科事典』）

800 万人。パレスチナには、23 万人。エジプト、シリア、小アジア、バビロニア各地に、それぞれ、100 万人以上が定住と推計される。

ユダヤ人の生存と活躍の場としてのヘレニズム都市。

2) ヘレニズム都市と諸文化の出会い＝ギリシア文化と土着文化の融合

→　ヘレニズム文化の開花

3) ヘレニズム都市の文化

・公用語としてのギリシャ語・ラテン語

・とくに、ローマ帝国時代になると、征服された諸地域の伝統宗教が、ヘレニズム都市へ流入し始める。都市的な状況に適合的な新しい宗教（神話）構築の実験。

ミトラ教や様々な密儀宗教。

4)ユダヤ人の直面した課題

ヘレニズム都市の文化状況への適合と民族のアイデンティティの保持。

シナゴーグにおける共同体、ギリシャ語訳聖書

↓

キリスト教へ

１．石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社。

２．市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。

市川裕編『図説　ユダヤ教の歴史』河出書房新社、2015 年。

３．荒井章三『ユダヤ教の誕生――「一神教」成立の謎』講談社。

４．山我哲雄『聖書時代史　旧約篇』岩波書店。

２．イエスの宗教運動の場合

都市のみではないが、都市との関わりは保持。 ガリラヤのヘレニズム都市、エルサレム

cf.　エッセネ派：パレスチナ各地の町や村井に散在して生活、厳格な沐浴、厳しい入会規則、徹底した禁欲、財産の共有など。

クムラン教団（1947 年の発見の死海文書の担い手）との関係は微妙。

cf. 洗礼者ヨハネ

３．エルサレム教会

４．パウロの異邦人伝道とヘレニズム都市のキリスト教会

５．ユダヤ戦争以降のキリスト教の動向

ユダヤ民族・ユダヤ教の危機とエルサレム教会の消滅　→　ユダヤ教の立て直し

→　ユダヤ教イエス派の排除　→　キリスト教の自立

６．パウロ主義という形態におけるキリスト教の基本方針の選択

パウロ的キリスト教の正統化、ユダヤ戦争後の一世紀後半（70 年代以降）

「一時代前はマイノリティでしかなかった「跳ね上がり者」で「急進派」のパウロの教えが、七〇年代以降、にわかに脚光を浴び浴び始めたのである。」（佐藤、151）

７．キュンク（『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社）：キリスト教的パラダイムの原型

「パウロが、キリスト教迫害者からキリストの宣教者に内的な方向転換を遂げたということ、これは私たちにとってついに解くことのできない最後の謎でありつづけるだろう。」

「それは若きキリスト教における、いやまさに古代世界全体における、時代の方向転換だった」、「使徒パウロとその神学の世界史的な意味」（22）

「キリスト教における最初のパラダイムの転換――つまりユダヤ人キリスト教からヘレニズム的な異邦人キリスト教への転換――を開始したのである。」（23）

「パウロにとって、「律法」がトーラーを意味するかぎりは、律法は、神の律法つまり神の意志の表現である。これは彼にとって自明の前提であった」（39）

「トーラーとその倫理的な諸帰結からの単なる自由ではなく、律法のわざからの自由なのである」、「彼は決して原理的にトーラーに反対して語ろうとしているのではない」（41）

「たとえパウロが、自分がユダヤ人であることを決して否定せず、ユダヤ的キリスト者たちがハラハーに従って生きることを禁ぜず、むしろ彼自身の生の領域においてはそうした生き方を肯定したとしても、それでもこうしたユダヤ的生活を、異邦人たちから切り離されたところで営んではならない。ユダヤ人と異邦人の両方からなる教会の統一のために、パウロはユダヤ的キリスト者たちから、ある放棄を期待したのである。その放棄とは、モーセのトーラーに対する放棄ではなかった」（44）。

「キリスト教をユダヤ教から切り離したのはパウロではなかった。それをしたのは、彼の

死後、エルサレムの第二神殿が破壊された後の、他の人々であった」(51)。

（２）パウロ的キリスト教の発展

２世紀のキリスト教（初期カトリシズム）への展開

８．「牧会書簡」（テモテ一・二、テトス）：二世紀前半

ヘレニズム都市という生活世界に定着する。

「パウロの神学と世俗的共通感覚との間のギャップを架橋するために、「模範」という論理を導入する」（土屋、125)、「牧会書簡の著者は、イエス、パウロ、テモテ、テトス、教会の指導者たちを順に模範にしていくことに、教会形成の原理を見い出そうとしているのである」、「歴史をさかのぼって規範を求めていくという発想」(128)

「パウロとの連続性は外面的模倣にとどまる場合が多く、必ずしも思想的内実には及ばない」、「現実の具体的な問題にとりくむうちに、いつのまにか、世俗的知恵が模範の像と融合する」、「パウロ主義から当時の通俗的倫理思想へとずれこんでいくのである。」(131)

「牧会書簡全体を支配しているのは、市民倫理の感覚である」。

「悪徳表」を頻繁に用いる。１テモ 1.9-10、6.4-5、２テモ 3.2-5、テト 3.3

「市民的キリスト教」「キリスト教的市民性」(133)

「一種の没個性的・非主体的な性格」「健全な教え」「健全な言葉」(134)

「初期の熱狂につきまとう過度に非日常的なふるまいを、世俗的共通感覚に照らしながら修正していくことは、宗教集団の維持発展にあたっては、不可欠な作業である」(134)

「教会を構成する社会的階級の変化」「次第に世俗的になっていく教団」(148)。

「パウロと牧会書簡との間には、確かにずれがある」(149)。

「表現形態が著者個人のみに帰せられるものではなく、著者の生きていた生活世界ともかかわっていること」(150)

「パウロと牧会書簡とのずれは、両者の時間的・空間的落差に起因するのではなく、むしろ共通の生活世界を基盤とするがゆえに生じたのではないかと思われる。そもそも宗教現象は、特定のカリスマ的人物だけでなり立つわけではない。そのカリスマに反応する信奉者たちがいて、はじめて教団が発生するのであり、そこではカリスマは、背後に横たわる生活世界の中へもどされた上であらためて受容される。信奉者たちは、ふだんは生活者として、自らの時代の世俗的とりきめすなわち市民倫理の中で生きている。しかし、それは必ずしも自覚されているとは限らず、あいまいな「良識」という形で、何となく公の合意を得ているのである。牧会書簡は、そのような信奉者たちすなわちメッセージの受容者たちの視座からパウロを描く」(153)

９．カリスマ的人物としての史的なパウロ：「愚か者になったつもりで」「気が変になったように」（２コリ 11.21,23)

牧会書簡：「平安で静かな生活を、真に信心深く真面目に送る」（１テモ 2.2)

（３）最初期のキリスト教思想の形成としての使徒教父

１．「使徒時代に直ちに続く時代を「使徒直後時代」と呼んでいるが、その時代におけるキリスト教思想の本流と思われるべきものは「使徒教父」の思想である」、「ただし「使徒教父」という呼称は十七世紀に初めて用いられたもので、使徒たちと直接の交渉を持った教父たちの意味である」、「内容的には、一世紀末から二世紀前半における異邦キリスト教の所産としての一群の文書を指している。新約聖書中の諸書と使徒教父の諸書との間には時代的に相重なる部分もあるが、概して言うなら使徒教父は新約につづく時代に属している」（有賀、98)

Patres Apostolici

２．「十二使徒の教訓（ディダケー）」、「バルナバの手紙」、「クレメンスの手紙（第一）」、「クレメンスの手紙（第二）」、「イグナティオスの手紙」、「ポリュカルポスの手紙」、「ポリュカルポスの殉教」、「パピアスの断片」、「ディオグネートスへの手紙」、「ヘルマスの牧者」（『使徒教父文書』所収）

３．使徒教父の歴史的背景：ユダヤ教との関係、ローマ帝国との関係

第一次（66-70）と第二次（132-135）のユダヤ戦争

課題：殉教精神、異端との対決、初期カトリシズムへ（信仰告白の成立、教職制の確立）

４．先行・隣接の宗教（とくにユダヤ教）から、イエスの出来事を解釈するのに必要となる象徴概念を受容・改変

メシア、人の子、ダビデの子、神の子、キュリオス、ロゴス

↓

テオロギア・クリスティ：「神についてと同じようにキリストについて」

イエスにおける神性の経験

↓

唯一神論との関係づけの課題（三位一体論、キリスト論）

後に体系的な解決を必要とすることになる。

５．主要な教説

・「無からの創造」、全能の神

「ヘルマスの牧者」の「第一にまぼろし」：「天に座し、無から有を創り、それを聖なる教会のために、ふえ広がらせたもうた神があなたのことを怒っておられます。」

・「神の救済の経綸（オイコノミア）」、キリストの先在、霊キリスト論

・聖餐論（アンティオキアのイグナティオス, Ignatios, 35 頃-110 以降）

６．殉教者イグナティオス（佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社）

・「イグナティオスは殉教が直ちに「神に至る」道であると考えており、それはまた当時のキリスト者たちの通念でもあった。普通の死と異なって、殉教死はキリストの受難に文字どおり与ることである。したがって殉教者は死後の中間状態を経ることなく、直ちに神のみまえに出ることができるというのが、かれらの信仰であった。」（有賀、108）

・「彼が排斥している異端には二種類」、「ユダヤ主義を非難」、「仮象説」「仮現説」への批判。「イエス・キリストが真実に誕生し、真実に受難し、真実に死に、真実に復活したということである」（109-111）

・「アンティオキア教会」への責任、「単独司教制」「「エピスコポス」は「神の代わりに」教会における主座を占める」、「普遍的教会としての＜ヘー・カトリケー・エクレーシア＞は、イエス・キリストのいますところなら、どこにでも現在する。その普遍的教会の具体的顕現が地域的教会である」（112）、「「感謝の祭」（エウカリスティア）としての聖餐」（112）

７．終末の遅延→制度的倫理的な規定の整備（新律法主義） cf. パウロ書簡と牧会書簡

「ディダケー」：生命の道と死の道とにかかわる倫理的教訓、教会的諸行事に関する規則（バプテスマ、断食、祈祷、聖餐）、使徒・預言者について、同信旅行者への待遇について、日曜礼拝について、職制（エピスコポイ、ディアコノイ）について、終末論的警告。

８．使徒教父の役割

迫害下の状況における正統教会への道。

初期キリスト教から初期カトリシズムへの歴史的展開（制度化・正統教会形成）のプロセスにおいて、キリスト教を担ったキリスト教指導者。正統キリスト教から逆に歴史

を遡及するときに、確認できる教会指導者たち。
　ヘレニズムのユダヤ教やグノーシスなどが競合する思想状況で、後の正統キリスト教へと展開する方向性を示している。

＜参考文献＞

１．コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局、『時の中心――ルカ神学の研究』新教出版社。
２．佐藤研『聖書時代史　新約篇』岩波書店。
３．青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡　イエス・パウロ・その後』新教出版社、2013 年。
４．土戸清『初期キリスト教とユダヤ教――ヨハネ福音書研究の諸課題』教文館。
５．土屋博『教典になった宗教』北海道大学図書刊行会。
６．Ｃ．キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
７．秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学学術出版会。
８．Ｇ・タイセン『新約聖書――歴史・文学・宗教』教文館。
９．フィオレンツァ『知恵なる神の開かれた家』新教出版社。
10.『使徒教父文書』《聖書の世界》新約II別巻４、講談社。
11. 小高毅『古代キリスト教思想家の世界　教父学序説』創文社。
12. 有賀鐵太郎「使徒教父」「教父哲学」『信仰・歴史・実践』著作集６、創文社。

＜火２の特殊講義＞

エイドリアン・ヘイスティングズ『アフリカのキリスト教――ひとつの解釈の試み』教文館、1988（1976）年。

「たとえあらゆる教会が聖マルコによる福音の奇蹟をもって始まるとしても、あらゆる教会の第二世代はテモテとテトスへの牧会書簡の関心事に専念することをもって終わるのである。新約聖書の展開の内的な機構は、新しい教会の進化・発展に注意すべき鍵となるのだ」(128)、「これらの教会も霊的治癒の伝道法を再発見して、自分たちまでがそれを実施しているかたである」(129)